

Reproductive Outcomes following Use of Barbed Suture during Laparoscopic Myomectomy

Kristen Pepin, et al

J Minim Invasive Gynecol 27 : 1566-1572, 2020

背 景：2008年に婦人科手術での使用が初めて報告されて以来、バーブ付き縫合糸は、低侵襲手術を行う外科医にとって、特に広範囲の縫合を必要とする症例において重要なツールとなっている。バーブ付き縫合糸は子宮筋腫核出術の際に、縫合修復に要する時間、手術時間、および術中の出血量を大幅に減少させることが一貫して示されている。しかし、バーブ付き縫合糸を用いた腹腔鏡下筋腫核出術後の妊娠成績を検討した発表データはほとんどない。

方 法：2008年4月から2016年12月の間に、Brigham and Women's Hospital および Brigham and Women's Faulkner Hospital で、バーブ付き縫合糸を用いた腹腔鏡下筋腫核出術を行った女性を対象とした。主要評価項目は妊娠経過とし、年齢、肥満度、妊娠歴、人種、保険の種類、子宮筋腫核出術の適応、手術データ、周術期の転帰に関するデータをレトロスペクティブに収集した。さらに、2011年の秋と2018年の冬の2回に分けて調査した。

結 果：合計486名の女性が、研究期間中にバーブ付き縫合糸を用いた腹腔鏡下筋腫核出術を受け、調査票は428人の女性に送られた。そのうち、240人が参加に同意し（56%）、33人が参加を辞退し（8%）、155人が回答しなかった（36%）。対照群のデータは、人種、保険の種類、および除去した筋腫の数を除いて、調査に回答した女性と回答しなかった女性の間で同等であった。筋腫核出術後に妊娠した女性と妊娠しなかった女性を比較すると、肥満度、分娩回数、妊娠率、人種、保険の種類、手術の適応、手術時の出血量、合併症の発生率、子宮腔への進入、手術時

間、摘出した筋腫の重量、筋腫の位置、閉鎖層、子宮内膜症の有無などについて、有意な差はなかった。報告された110件の術後妊娠のうち、60件の生児が誕生した（55%）。出生時の平均妊娠期間は37.8週で、異常胎盤は3例で、すべて前置胎盤であった。胎児発育不全が2例、妊娠高血圧症候群が3例であった。経膈分娩は6例で、残りは帝王切開による分娩であった。産後出血（帝王切開時の出血量が1,000 cc以上と定義）が2件、術後肺塞栓症が1件であった。子宮破裂の報告はなかった。合計34例（30%）の妊娠が自然流産だった。

結 語：われわれの研究結果は、バーブ付き縫合糸を用いた腹腔鏡下筋腫核出術は、手術時間、および術中出血量を大幅に減少させるだけでなく、将来の妊娠に対しても安全であることを示した。

【コメント】 考察で述べているが、吸収時間は120日から180日とされている。術後の最初の妊娠までの平均期間は18.0か月であったが、個々の筋層の修復具合にもよるため、避妊期間は3か月もあれば問題ないであろう。今回の研究では、出生率が過去の報告よりも低いのは、妊娠継続中の女性や中絶した女性が含まれていたためだと考えられる。また、妊娠合併症はほとんどなく、子宮破裂の症例もなかった。手術時間の短縮や出血量の減少については多数の報告があり、今後腹腔鏡下筋腫核出術において、バーブ付き縫合糸の使用はますます増えると考えられる。また、本論文では触れられていないが、コストの面についても考慮する必要がある。

太田啓明, 塩田 充

(川崎医科大学 婦人科腫瘍学教室)